

大正十五年度の新嘗祭にいなめさい 設楽町の献穀田と献穀畑

昨年、新天皇が即位され、平成から令和へと変わりました。令和元年十一月、宮中で皇位継承儀式の一つとして行われた大嘗祭も話題となりました。

大嘗祭は、天皇即位後、最初に行われる新嘗祭です。

新嘗祭に宮中の神殿にお供えする米と粟を育てる田畑が「献穀田」と「献穀畑」です。

大正十五年に設楽町でも「献穀田」「献穀畑」を設置し米と粟を献納した記録が残されています。献穀田の記録は七原家によって大切に保管されています。そして、献穀田の五十周年を記念して、献穀田の奉耕者として選抜された長江の遠山又吉郎さんによって写真帳が整理されています。(遠山和永氏蔵)

「献穀田」(精米一升上納)

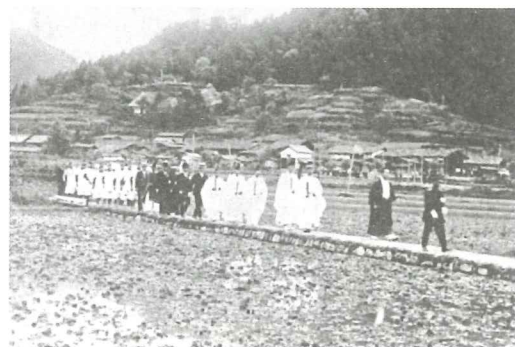
精米献穀者 田口町清崎

七原貞治郎
献穀田 田口町清崎字中田
(二畝歩)

この献穀田の場所は、新しい郷土館の建築現場です。

写真を二枚紹介します。

一枚目は、六月一日の「御田植式」の式典に向かう関係者の行進を写したものです。



二枚目は、御田植式の写真です。献穀田は竹矢来で囲まれています。早乙女や太鼓を持つ奉耕者も整列しています。



農作業に従事する奉耕者には、

男子八名、女子九名が選抜されました。種まきから稲刈りまでの警護は、消防組員が交代で行いました。

九月には台風に襲われ、関係者、青年団、消防組員が総出で防衛し難を逃れたそうです。

「献穀畑」(精粟五合上納)

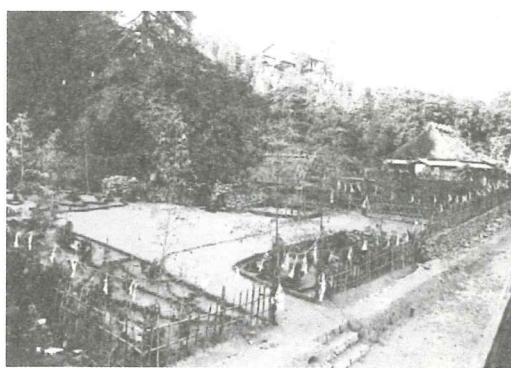
精粟献穀者 段嶺村田内

林 茂三郎
献穀畑 段嶺村田内字近久保
(二畝歩)

左は、献穀畑の全景写真です。

(林艶子氏蔵)

右奥の竹矢来に囲まれている部分が献粟畑です。粟はもう実っており、注連縄が張られている等、写真の様子で判断すると、摘穂祭が間近の光景と思います。奥の家屋は林家の居宅です。



献粟畑の運営も村中で行いました。村内各区が交代で警護し、

青年団が雀を払ったりもしたそうです。

現在、献穀畑の跡には、記念碑が建てられています。

新嘗祭は、宮中で最も古くから行われ、最も大事にされている祭儀です。農耕と深く結びつく儀式で、宮中が農業を如何に大切にしているかを物語る儀式でもあります。

新嘗祭には、天皇がその年の新穀や新酒を、天照大神を始めとする八百万の神々に供え、農作物の恵みに感謝し、天皇も神と向かい合って、供物と同じ米のご飯、粟のご飯、白酒、黒酒等を召し上げるのだそうです。

新嘗祭は、古くからの皇室行事でしたが、明治以降、主権を天皇とする新政府により、国民の祝日となり、明治二十五年からは、祭儀にお供えする新穀も各府県の有志農民より献納するようになりました。その事により、大正十五年の新嘗祭は、愛知県を代表して北設楽郡が献納することになり、郡内各町村長が協議し、米と粟を作る田畑の献穀者と、田畑の世話をする奉耕者が決定されました。

戦後は、都道府県による任意献納となり、以来、愛知県は県内農業団体が、農業祭献穀事業として持ち回りで行っていきます。

(設楽町文化財保護審議会委員

加藤 紘市)